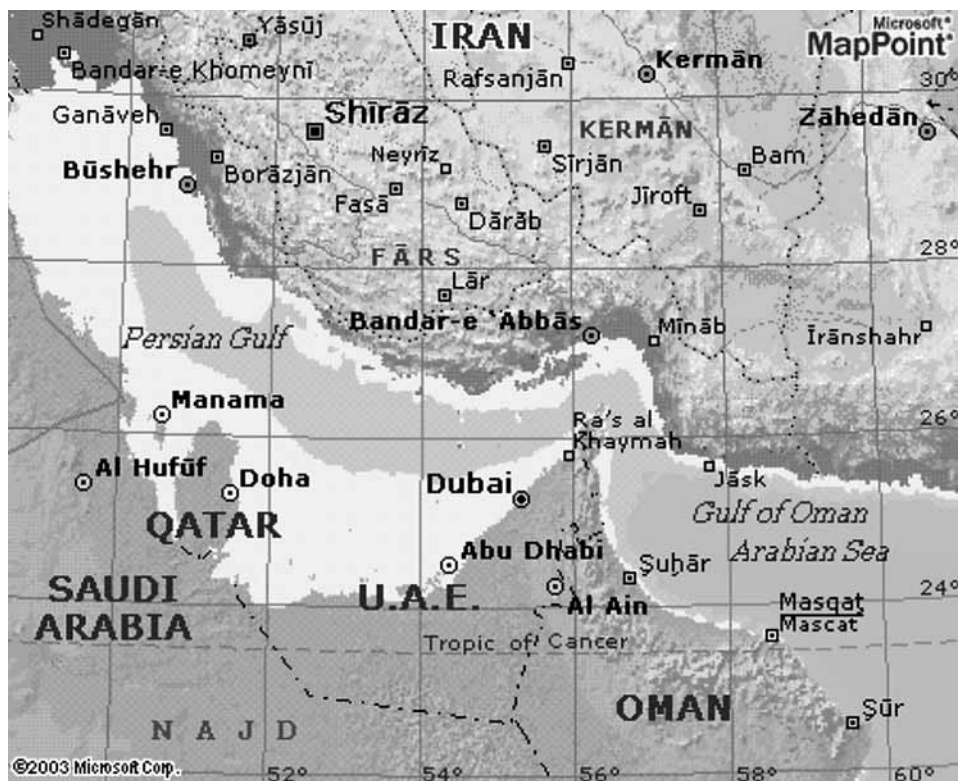


イランとドバイ

(財)日本エネルギー経済研究所
中東研究センター

研究員 坂 梨 祥



出所 : <http://www.persiangulfonline.org/images/MSmap.jpg>

ペルシア湾の北岸と南岸を結ぶ交易関係は、今日に始まったものではない。今日のイラン、あるいはアラブ首長国連邦、という国境が確定するずっと以前から、人々は交易を通じ、ペルシア湾の兩岸を自在に行き来していた。19世紀末から20世紀初頭にかけて、当時のイラン（カージャール朝ペルシア）が財源確保のため関税を引き上げると、ペルシア湾北岸（イラン側）の商人たちは南岸に移り住み、徴税を逃れた。今日のドバイのバスタキヤ（Bastakiya）地区は、もともとイラン南部バスタック（Bastak）の住人が移り住んだ場所であることからこのように呼ばれている。バスタキヤは今日、ドバイの「伝統的町並み」

を経験できる貴重な場所として、観光名所のひとつとなっている。

イラン人とは誰を指し、UAE人とは誰なのか。ペルシア湾北岸からずっと昔に移り住み、服装も白いカンドゥーラに身をつつみ、イラン料理屋でケバブを食べながらペルシア語で談笑する人々を見るにつけ、これらの人々の「国籍」にこだわる意味はあるのかと、ふと自問すらしてしまう。そのような「イラン人」が見られるのはことドバイだけに限られない。バーレーン、クウェート、カタールなど湾岸諸国にはそれぞれ、土着化し、その一部は地元の「名士」となっているイラン系のファミリーが存在する。そしてこれらのイラン系の人々は、自らの出自を含むイランとの固有のつながりを生かし、これまでペルシア湾の兩岸を結ぶ様々なビジネスを展開してきたのである。

しかし昨今、イラン核問題をめぐる国際的な圧力の高まりの中で、イランとドバイの関係は、これまでとは異なる形で注目を集めつつある。今日のドバイの繁栄の原動力ともなってきたフリー・ゾーンが、制裁の「抜け道」となっている可能性が再三指摘されているのである。国連制裁下で様々な自由が徐々に制約されつつあるイランにとって、今日のドバイはたしかに、不可欠の「風穴」を提供してくれる土地となっている。

1. ファクトシート

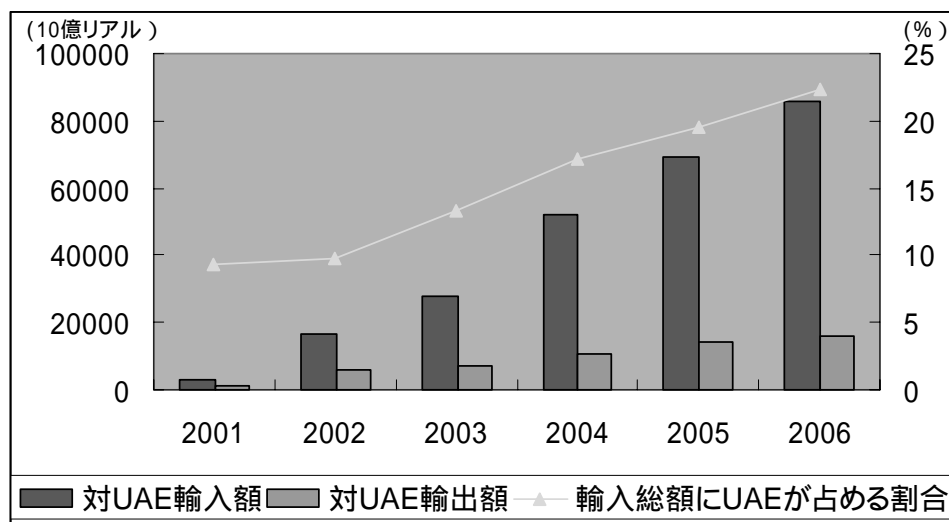
UAEに在住するイラン人は今日45万人に上ると言われ、そのようなイラン人を対象に、現在 UAE では2紙のペルシア語日刊紙が発行されている。2007年にはテヘラン市が発行するハムシャフリー紙のドバイ版が、2008年には「イランでナンバーワンの経済紙」、Donya e Eqtesad (『経済の世界』)紙のドバイ版が、それぞれ発行を開始した。ドバイ在住のイラン人を対象としているだけあり、これらの新聞にはイラン・UAE 関係に関する様々なデータが(網羅的にではないが)盛り込まれている。これらの報道に基づき、貿易関係を中心とする今日のイラン・UAE 関係の概要を整理すると、以下のとおりとなる。

6月8日付 Donya e Eqtesad 紙ドバイ版によれば、2007年、UAE はイランの最大貿易相手国であり、2007年の UAE からイランへの輸出額は114億ドルに上った。これはイランの全輸入額の約3割にあたり、同じく2007年のイランから UAE への輸出額は22億ドルと、イランの全輸出額の2割弱を占めている⁽¹⁾。イランは UAE から主に自動車、電気製品、ガソリンなどを輸入し、UAE に対しては食品、建築資材、石化製品、カーペット、ピスタチオ、陶器、農産物などを輸出している。

また、5月28日付 Donya e Eqtesad 紙によれば、イランは UAE にとって、第2位の再輸出先となっている。ドバイ国際統計局の発表によれば、2008年第1四半期の再輸出額は2007年第1四半期と比較して73%増加し、102億ドルに達した。この約3割に相当する32億ドルはインドに、14.1億ドルはイランに、8.9億ドルはスイスに再輸出されたという。目安としてこれを4倍にして計算すると、UAE からイランへの輸出額の約5割が、再輸出によるものであることがわかる。

他方で、対 UAE 投資額から見ると、イランは第5位であることが、6月24日付の同じく Donya e Eqtesad 紙により報じられている。UAE 経済省の発表を引いたこの記事によれば、2007年、イランの対 UAE 投資額はイギリス、日本、インド、そしてアメリカに次いで

《参考》イランと UAE の貿易関係⁽²⁾



出所：イラン統計局

第5位であった。この報告によれば、2007年の対UAE投資総額は186億ドルに上り、1位のイギリスは45億ドル、2位の日本は38億ドル、インド20億ドル、アメリカ11.4億ドル、次いでイランが7.6億ドル（対UAE投資総額の4%に相当）を、UAEに投資した。

対UAE投資額の順位を報じたこの記事によれば、UAE経済省の関係者は「イランからの投資額は10億ドルにも満たない」と、「大量の資本が年々イランからUAEに流入している」とする一部の憶測を否定した。その一方、ドバイにあるイラン商工会議所のハーシェムプール副会頭によれば、今日UAEに在住するイラン人の資産総額は3,000億ドルにも上る⁽³⁾。

2. ドバイに住むイラン人

ドバイのイラン総領事館によれば2003年以降、UAE在住のイラン人人口は「倍増した」。しかし前述のとおり、ドバイのイラン人コミュニティの歴史は古く、ドバイに初めてイラン人学校が設立されたのは1950年代のことである。ドバイのイラン人学校は当時のドバイ首長、シェイク・ラーシドの承認を得て、イラン教育省の管轄下に設立された。1970年にはイラニアン・ホスピタルも設立、その後1979年の革命を経て1985年には、イラニアン・ホスピタルの向かい側にシーア派のイマーム・ホセイン・モスク（敷地面積6,000平米）が建設された。次いで1990年には、ホテル、映画館、スポーツクラブ、図書館、学習センターなどを備える多目的施設であるイラニアン・クラブ（敷地面積5万平米）が設立され、今日に至っている。

1985年のイマーム・ホセイン・モスクの建設は、ドバイ在住のホメイニー師代理人であるボルゲイ師の尽力により、イラン・イスラーム共和国赤新月社とUAE在住のシーア派コミュニティの支援を得て実現した。ホメイニー師が死去して以降は、最高指導者としてその後を継いだハーメネイ師の代理人が、代々このモスクの金曜礼拝導師を務めている。

これに対し、1990年に設立されたイラニアン・クラブを経営するのは、イラン最大の財団（ボンヤード）のひとつ、被抑圧者・戦傷者財団（通称モスタザファン財団）である。イラニアン・クラブの宿泊施設は、ドバイを訪問するイラン政府および政府系企業の関係者により頻繁に使われている。2007年4月、アフマディネジャード大統領がドバイを訪問した際は、このイラニアン・クラブにおいて、ドバイ在住イラン人と大統領の会合が行われた。

ドバイに住むイラン人ビジネスマンの「同業組合」としては、1992年に、イラン商工会議所（Iranian Business Council Dubai）が設立されている。そのモオタマン会頭によれば、イラン商工会議所はイギリス、インド、パキスタン商工会議所に次ぐ第4の商工会議所として設立され、メンバー企業数は当初の5社から今日では300社以上に増えた⁽⁴⁾。

一方で、イラン商工会議所のハーシェムプール副会頭によれば、今日ではイランの政府機関および政府関係者も、ドバイへの投資に積極的に乗り出している⁽⁵⁾。たとえば今年6月30日にはテヘランで、「第2回 UAE 輸出・投資・貿易セミナー」が開催されており、そこでスピーチを行ったイラン・UAE 合同経済評議会のダーネシュマンド会長によれば、現在ドバイで登録されたイラン企業数は5,500社に上る⁽⁶⁾。他方、ドバイ商工会議所の側は、ドバイのイラン企業数を8,050社と発表している⁽⁷⁾。

ハリーフア駐イラン・UAE 大使によれば、今日イランと UAE を結ぶ空の便は、週240便が就航している⁽⁸⁾。複数の首長国から、イラン全国の様々な都市に直行便が飛んでいるものと見られる。イラン人のドバイ・UAE 訪問目的は、ビジネス、観光以外には、第三国への移住に際する一時的な滞在のためというものがある。これに対して UAE のイラン訪問目的は、医療、あるいは聖地の参詣であることが多い。一方、イランと UAE 間を行き来する貨物船の数は、1日7,000隻にものぼるとい⁽⁹⁾。

3. 歴史的関係

近年に入り順調に増加しているイランとドバイの貿易関係は、それ以前から脈々と続くペルシア湾兩岸を結ぶ交易関係の延長線上にあるものである。1971年の UAE 建国以前、今日の UAE が「休戦諸国（trucial states）」と呼ばれていた時期のイランとドバイの関係については、「休戦諸国」を保護領としていた英国政府の記録から、その一面をうかがい知ることができる。「インドへの道」ペルシア湾地域に派遣されていた大英帝国の「エージェント」の記録によれば、ペルシア（1935年以降、国名はイランに改められるが、英国の記録では変わらずペルシアと呼ばれている）とドバイの関係は伝統的に深く、ペルシア政府はドバイを含む「休戦諸国の国民を、ペルシア国民として扱っていた」。たとえば「ドバイの首長とその息子」は国籍など気にせず、「まったく自由に定期的にペルシアを訪れ、狩りを楽しんでいた」とい⁽¹⁰⁾。

この記録によればペルシア政府は、重要な収入源の一つとして交易からは安定的に関税を取り立てることを目指していたが、ペルシア湾兩岸を行き来する交易船は「ほとんどの場合」ペルシア政府の関税規則などは無視しており、「より小さな港経由で」関税とは無関係の交易が脈々と行われていた。ペルシア政府はこのような「密輸貿易」に従事するドバ

イのダウ船を取り締まろうとはしたものの、その取り締まりは散発的なものにとどまり、効果も限定的であったという¹¹⁾。

1928年の記録によれば、当時のドバイにはすでに「多数のペルシア人が在住し、アラブ人人口との関係は概ね良好」であった。ペルシア政府はドバイに税関官吏を派遣し、ドバイにおける交易から関税を取り立てようとしたこともあったが、ドバイ政府はこの官吏に速やかな国外退去を命じ、ペルシア政府はこの試みについてはすぐに断念した。他方、今日も存続するアブー・ムーサおよび大小トンプ島をめぐるのは、ペルシア政府は繰り返しその領有を主張したものの、それがイラン（ペルシア）とドバイの関係に影響を及ぼすことはなかった。唯一1952年、イランの石油国有化政策によりイランと英国の国交関係が断絶した時にのみ、当時英国の保護下にあったラーシド・ドバイ首長がイランへの入国を拒否されるということが起こったという¹²⁾。

4. 今日のイランとドバイ

UAEの建国前夜にイランは大小トンプ島を「占拠」、その後1992年にはアブー・ムーサ島における支配も拡大し、「三島問題」は今日でも、イランとUAEの間の未解決問題であり続けている¹³⁾。しかし、三島問題があるからイランとUAEの二国間関係、あるいはイランとドバイの関係に「支障」が生じているかといえば、必ずしもそうとはいえないところがある。

イランは今日その核技術開発をめぐり、国連の制裁下にある。また、米国主導の「有志連合」による金融制裁の対象ともなっている¹⁴⁾。これらの制裁の中にあり、交易をめぐる様々な自由が制限されているイランにとって、ジュベル・アリ・フリー・ゾーンを有する目と鼻の先のドバイは一つの「活路」となっている。ドバイのフリー・ゾーンはまた、かつてイランが調達していた核技術開発の関連設備の輸送拠点ともなっており、すなわち核技術開発の時代も制裁下の今日にあっても、イランはドバイを必要とし、一方のドバイもイランにとっての「中継貿易の拠点」として、相応の利益を得てきたのである。ドバイにならないフリー・ゾーンを立ち上げているUAEのラアス・ル・ハイマ首長国のフリー・ゾーン責任者が「イランとの交易の拡大」に期待する発言を行っていることは象徴的であるといえよう¹⁵⁾。ラアス・ル・ハイマはまさに大小トンプ島の領有をめぐり、イランと対立した（している）首長国であるが、経済関係のインセンティブは必ずしも政治問題に縛られないことが、このことから明らかとなっている。

三島問題の残り一島、アブー・ムーサ島をイランと「共有」してきたのは、ドバイに隣接するシャルジャ首長国である。しかしこのシャルジャは、近年そのような問題を抱えるイランから天然ガスを輸入する契約を結び¹⁶⁾、エネルギー供給源を多様化するための独自の政策に乗り出している。また、UAE全体を取ってみても、UAE企業がイランのシーラーズに発電所を建設する計画¹⁷⁾、あるいはイランの電力グリッドをUAEにまで延長・拡大する計画などが取り沙汰されている¹⁸⁾。さらには、UAEからの対イラン投資という面では、UAEのエッティサーラート社がイランの携帯電話事業への関心を表明したり¹⁹⁾、さらにはイランの「未開の観光名所」に対する投資を検討するUAE企業も出てきているといわれ

る²⁰⁾。元来交易を中心に発展してきたイランとドバイ、あるいはイランと UAE の関係は、今日ではより多方面にわたり深化してきているということがわかる。

おわりに

2007年5月、イランのアフマディネジャード大統領はイランの大統領として初めて UAE を訪問、イランと UAE の「文化的近接性」を強調するとともに、隣国同士としての「共存共栄のためのパートナーシップ」を呼びかけた²¹⁾。他方、ドバイのシェイク・ムハンマド（ドバイ首長兼 UAE 副大統領）は2008年2月、イランを訪問し、イランと UAE（そしてドバイ）は特に貿易関係においてさらに関係を拡大させることができると強調した。

イランとドバイの関係が、「順風満帆」であるというわけではない。制裁下のイランに対し、ドバイが万能の解決策を用意しているわけでももちろんなく、そればかりかドバイにはアメリカからしばしば財務省の関係者が訪れ、「対イラン制裁順守」のための圧力をかけている。しかし、イランとドバイの交易関係の歴史は古く、これまでつねにそうであった通り、政府のコントロールの及ばない取引が数多く存在し、さらにはフリー・ゾーンという制度はそもそも、「コントロールを排す」ことにその存在意義を置くものである。

アフマディネジャード大統領は GCC 諸国との関係改善のこころみにおいて、「ペルシア湾岸諸国の間に『対立や分裂』を引き起こそうとする外国勢力の思惑にはまってはならない」と繰り返し主張している。領土問題、宗派の相違、そしてイランの大国意識とそれに対する周辺諸国の警戒感など、「対立の芽」は実際のところあらゆるところに転がっている。しかしイランとドバイの関係に限っていえば、両者間に存在する緊張関係は十分に認識された上での「協力関係」が、今日では強調され、模索される傾向にあるといえよう。イランと UAE は歴史と未来を共有する隣国同士なのであり、二国間関係を規定するのはあくまでも当事国の意思であり第三国の思惑ではないという自己主張も、今日では両者間で共有されているように思われる。

（注）

- (1) 輸出額・輸入額ともに、イラン暦1386年（2007年3月21日～2008年3月19日）の数字である。
- (2) 2006年の為替レートは年平均で1ドル＝約9,200リアル。
- (3) “Dubai Iran Ties Thrive Against Odds,” (2007年3月22日付 Arab News)。UAE におけるイラン人の総資産額については、2005年の時点で「UAE のテレビ」が「すでに2,000億ドルに上り、年末までには3,000億ドルに達する見通し」であると報じた旨を、イランの ISNA 通信社が報じている（2005年7月12日付 ISNA）。
- (4) 2008年5月28日付 Donya e Eqtesad。
- (5) 2007年3月22日付 Arab News。
- (6) 2008年6月30日付 ISNA。
- (7) 2007年3月22日付 Arab News。
- (8) 2008年6月9日付 Donya e Eqtesad 紙とのインタビュー。

- (9) 2008年6月30日付 ISNA。
- (10) The Persian Gulf Historical Summaries 1907 1953 , Vol II “ Historical Summary of Events in the Persian Gulf Sheikhdoms and the Sultanate of Muscat and Oman (1928 1953) ” , p .106 .
- (11) 同上。
- (12) 同上 , pp .106 107 .
- (13) 1971年末の英国のペルシア湾からの撤退と UAE 建国を前に , イランは休戦諸国の保護国である英国に対し20世紀を通じて再三主張し続けていた三島の領有権を改めて主張し , シャルジャ首長国との間ではアブー・ムーサ島の「共同管理」で決着 , これに対してラース・ル・ハイマ首長国は大小トンプ島の領有権をめぐり「妥協」することを認めなかったため , イランはこれらの2島については英国撤退の前夜にこれを占拠した。
- (14) 各種制裁がイラン・UAE 関係に与えている影響については , “ Banks in UAE put curbs on Iranian trade finance , ” 2007年11月16日付 gulfnews “ Iran sanctions hit Dubai business , ” 2008年1月2日付 The Washington Times などを参照。
- (15) Donya e Eqtesad 紙掲載インタビュー。
- (16) 2001年 , シャルジャの Crescent Petroleum 社はイラン国営ガス輸出会社 (NIGEC) との間で5億 cf/d を25年にわたり購入する契約を締結した。イランからのガス輸出は2007年にも開始される予定であったが , イラン側が提示した輸出価格再設定の問題に決着がつかず , 輸出開始は遅れている。
- (17) 7月31日付 MEED によれば , ドバイの Quest Energy はイラン電力計画管理会社 (Mapna) との合併で , シーラーズに発電プラントの建設を計画している。
- (18) 2008年6月15日付 Donya e Eqtesad。
- (19) 2008年5月24日付 Donya e Eqtesad。
- (20) 2008年6月9日付の , 駐イラン UAE 大使の Donya e Eqtesad 紙とのインタビューによる。
- (21) シェイク・ムハンマドはアフマディネジャード大統領の UAE 訪問に際し , ドバイ国際空港に到着した大統領を自らが運転する車で出迎え , さらには大統領を助手席に乗せて市内の名所を案内した。ドバイのカリスマ的指導者であるシェイク・ムハンマドは , ペルシア語も自由に操るといわれている。